

米村貴裕

Receptent Beast

レシピエント・ビースト

登場人物

竜ヶ崎将人

I T企業の若きエース。ゲーム関連の知識が活かされ、「エルシャーナ」とドナー関係になってしまう。やや臆病な面もあったが、異生命体を母とする本当の生まれ変わりを体験し、姿形と共に精神面も変わる。

清水アヤ

竜ヶ崎と同じ企業で働く、姿や能力共にスマートな女性。対人関係を円滑にするためか、社内では天然娘ぶりを発揮するものの竜ヶ崎にだけは理知的に接する。スタイル抜群で冷静、加えて度胸もあるのだが、それには厳しく、とてつもない理由が隠されていた――。

エルシャーナ

盲目で、なおかつ翼があっても決して自力では飛べない孤高のシルバードラゴン。「皇帝」が行う、むりやりなドナー関係の構築を阻むレジスタンスのリーダー。

皇帝

現代の人類を家畜とみなし、仲間たちに肉体の奪取を行わせる首魁。しかし、そんな欲望の裏にひそむトラップには、まったく気づいていない。カニバリズム（共食い）を平然と行う巨軀の異・生命体。

ガーゴイル

皇帝側の先遣隊で、たびたび竜ヶ崎たちと衝突する。人間・志藤毅を体内に取りこみ共に、皇帝が難なく地球へ帰還できるように、破滅的な地ならしを行う。

メルルシーサ

義妹のエルシャーナが告げた、皇帝にも匹敵する謎の異生命体。レジスタンス側の言葉に耳を傾けているらしいが……？

第一部　〈エイリアン〉の章

- (1) シルバードラゴンとの同化／ 7
- (2) 生き物たちの正体と欲望／ 17
- (3) 高機動型・ワイバーン／ 29
- (4) ドラゴンとアンドロイドの肌触り／ 43
- (5) レジスタンスの崩壊／ 57

第二部　新・生命体の章

- (6) 彼の出産と定めし遺伝子／ 70
- (7) カニバリズム／ 90
- (8) 〈生け贄〉半竜半人の自分とアヤ／ 100
- (9) 肉体からの摘出——ミカエルが示すもの／ 114

第三部 神のプロミネンスと紅炎の章

- (10) 絶叫・命の定義とは？／127
- (11) 八分間の変身／144
- (12) 魂のブレイクスルー／163

●スタッフ●

○編集

佐田 満

○表画・カット

楠原 彰

○表下

yuki

○表上

デザインオフィスはな

○絵下

宇田川森和

第一部 〈エイリアン〉の章

(1) シルバードラゴンとの同化

「ぐ……オ、オレのし、心臓が、あ——」
わめいた中年男性の体が背広着もろとも、ふたつに裂けた。

一帯にとめどなく鮮血を垂れ流し、赤いロープ似の小腸が爆発する勢いで、裂け目から吹き出ている。引きずられる形で血みどろの臓器類があふれ始め、わめいた男性の「心臓」だけが激しく脈打ちながら、宙へ浮かび上がった。

様々な背格好の老若男女が行きかう夜の新宿・アルタ前は騒然とした状態に陥り、絶命した男性を遠巻きに囲う形で、人垣ができる。

みな茫然とした面持ちで立ちすくみ、鼓動する心臓を眺めていた——。

新入社員の竜ヶ崎将人は午前四時のサーバ・メンテナンス業務に備え、同僚の清水アヤとレストランへ向かう途中、事件を目の当たりにする。

当初は、趣味の悪いパフォーマンスかとも思えたが、この異様な雰囲気はただごとではない！

さらにギャラリーのなかにも、もだえ苦しむ人たちが現れだした。

学生の服が破れて背中から、節くれだった脊髄そのものが引き剥がされる。

「う、がつ」

若い女性の顔が奇怪に歪み、ふたつの眼球のみが神経の尾を伸ばし、中空へ吸い上げられていく。

たじろぐ竜ヶ崎がスーツを揺らして目をみはると、視界上方にビルほどのスフィア（球体）が映った。

金属光沢のスフィアは音もなく夜空を漂い、人間の部位をかきこんでいるかのよう。

よもやエイリアンの来襲、あるいは二一世紀に蘇った魔王の侵略行為なのか!?

日ごろからオンラインRPGを管理する竜ヶ崎の頭では、荒唐無稽な内容も、現実的なものとして認識できていた。

いいや、誰しもが猟奇的な事件に対し、狂ったイメージを持っているであろう。

しかし自分と共に、ファンタジックなイベントを考案する清水アヤも、常識から外れた考えを信じているに違いない。自分自身はどこか、この事態を傍観しているふしがある。

人々が逃げる間もなく、スフィアから半透明のカベが作られ、現場は出口のない密閉状態になった。もちろん竜ヶ崎も、そのなかに含まれている。

彼がとつさに、小柄で線の細いアヤを守るべく

抱き寄せたところ、彼女の体も不自然な具合にうごめきだした。

竜ヶ崎が顔をやると、アヤは背を丸めて体をこわばらせ、甲高くあどけなさの残る声を響かせる。

「あたし、守るため……、一時的なドナーに……」

「なに、アヤさんがドナーだって？」とたずねかけた矢先、彼女が倒れこむふう腕のなかから離れ、路上で四つんばいとなった。

ポニーテールを揺らすアヤの体は膨らんでいき、楚々としたジャケットが音を立てて引き裂けていく。ランジェリーも破れて竜ヶ崎が初めて目にする、なめらかな素肌は新雪そっくりの白さを放ちだした。

そんな彼女がスリムに伸びる首をもたげて、細長くなつた口を開いた。

「戦闘ペガサスになつて、惨劇を——」

アヤが臓器を奪われないよう、竜ヶ崎は長軀を

引き締め、懸命に身をよじった。捨て身でスフィアと彼女との盾となるうとしたとき、自身の背に冷たい感触が現れる。そこから電気的な刺激がおとずれ、竜ヶ崎の頭では、深い余韻のある女性的な「声」がこだました。

（すいません。いつときでかまいません。わたしのドナーとなってください）

これは自分も相手に体を貸す……ということ。

「アヤさんはすでに、ドナーになることを受け入れたのか？」

（そうです。サンプリング（データ収集）しているッスフィアを帰還させてはなりません）と相手が認め、緊迫した感じの言葉を送りつけてくる。

（ふたりは脳波の形状が……、思考パターンが我々レシピエント・ビーストと拒絶反応を示さない人間なのです）

「あなたはビースト——？」

（どうか……、お願いです。我々ならこの現状を好転させられます！）

竜ヶ崎の頭でエコーする言葉は、うそ偽りのない、懇願の響きをたずさえていた。少なくとも自分には、そう聞こえた。

ましてや言葉の主が邪悪な存在ならば許可を求めず、むりやり体を奪っていただろう。

さらにスフィアの残虐行為に対しては、同じ人間として反吐が出る思いだった。非力な自分で、事態を食いとめられるものならば……。

「わかりました」と、竜ヶ崎は周囲を見まわし、強くうなずいた。

（ありがとう。我々の末裔よ）

「え、末裔ですか？」

こざっぱりとした髪をかき上げた直後に、全身がマグマさながらに熱くなった。体中の血が滾って、筋肉はあぶくを放つかのごとく、不定形にお



どりだす。

目いつばいまで引き伸ばされたスーツとズボンが千切れ、足は太く雄々しく膨らんでいった。粉々になった革靴の先からは、黒く怪しい光沢のカギ爪が生える。

「心」のすぐそばには別の意識を——かなり女性的で官能的だ——を覚え、これは文字どおり肉体的な同化であった。

実際、竜ヶ崎はやわらかな生肌を持つ、ほのかな温もりや、甘く切ない匂いさえ感じ始めていた。

こんな自身の視点は展望エレベーターを思わず急上昇をつづけ、スフィアが作ったカベのなかで逃げかう人々の姿が、一段と小さくなった。

そして竜ヶ崎は生涯初めて、流線型にとがった自身の鼻先を見ることがとなる。すでに人の皮膚は失われ、この体は、いぶし銀のウロコで覆いつくされていた。

たてがみらしき銀色の毛も目に入る。

……ここまで力がある存在ならば、人間にたよらなくても問題ないのでは？

こう思った途端、（わたしには視野がありません）と未知なる女性の言葉が、ややぶつきらぼうに応じてきた。目が見えない……。相手は自嘲しているのか、その声は感情を伏せているふうに、冷たい余韻を持っていた。

（運動機能をつかさどる小脳の一部もないのです。本来なら死んでいた身。自力の器官だけではほとんど、なにもできません）

色々な考えが竜ヶ崎の頭をめぐり、自然と脳天に力が入った。

（それで「ドナー」が必要なのか——）

（単純に言えばそうです）と相手が応じ、頭に力を入れれば、心の言葉を伝えられる点が理解できてくる。

竜ヶ崎はすでに変身し終え、厳つく角ばった銀色の両手を呆然と眺めていた。しかし心での会話を確かめるべく、いや、なにより極度の不安感を打ち消すべく、頭へふたたび力をこめてみる。

相手はやさしそうなので、こちらをサポートしてくれるかもしれない。

(……あなたの器官は、あのスフィアに奪われたのですか?)

(いいえ。生まれながらに持ちあわせていません。わたしたちの間ではもう、すべての器官を備えた子供は生まれません)

事実のみを冷やかに聞かされ、竜ヶ崎の不安感はずるづるばかり。

と、ここで突然、耳障りな金属音が聞こえてきた。

頭頂部に角を伸ばす、翼の生えた白馬(アヤの化身こと戦闘ペガサスらしい)が飛翔し、半透明

のカベを突き破ったのだ。

すじ状に大きく割れた外部との隙間に、人々が脱兎となり、おしよせている。戦闘ペガサスのアヤは、なんども角をおち当てて、カベの割れ目を広げていった。

彼女を変身させた相手は、どこに不自由をしていたのだろう。

(パルージャには三半規管が存在していません。翼はあれど決して飛べない……)と、静かな説明があった。そんなペガサスの羽はたきはりりしく、アヤの補佐を受けた飛行も優雅だった。

はたして事態が落ちついたとき、相手はアヤの体を解放してくれるのだろうか。自分も手足や体の格好から、伝説上のシルバードラゴンと化しているのを見てとれる。

視線は建物三、四階程度に高くなり、筋骨ばった足を踏み出すとアスファルトが陥没し、足型状

にへこんだ。

接触している女性さながらの存在からは、体を自由に動かせるという、よろこびの感情がわずかに届いている。

もしも、この変身がとけなかつたら――。

（変身ではなく、正確にはわたしの細胞と、一時、同化していただいた形です）

相手は「一時」との言葉を使ったが正直、こんな事件との遭遇や体についての不安が高ぶってくる。

（あなたは何者なんです？）

（わたしはエルシャーナ）

いらだしげに問いかけても、答えはそれだけだった。

しかし形になっていない相手の意思だけは、竜ヶ崎の心に強く広がっていく。そう、スフィアを野放しにしてはおけないと――。

肩甲骨付近に感じる重みは、たぶんドラゴンの翼であろう。力を入れてみたところ、エルシャーナがおし留めてきた。

（お話したとおり、わたしは翼を満足に動かせず、飛び方を知りません。けれど「ドラゴン」最大の武器はご存知でしょうか？）

それは十分よく知っている。

空想世界にあこがれてまた、殺伐とした世の中に、ちよつとばかりのファンタジーを提供するべく、自分はIT業界に飛びこんだのだ。

武器は毒ガスなり火炎なりの「ブレス」だろう。だけど、夢と現実の境界線は残念ながら、はつきりとしている。ブレスは生物学的に使えるものなのか？

すると竜ヶ崎の視界が微かに揺れた。エルシャーナがぎこちなく、首を左右に振ったのだ。相手の言葉も淡々と伝わってくる。

(わたしは雷撃らいげきが使えます。地球の電気ウナギと同じ理屈りくつですよ。時間がありません。頭をスフィアに定めてください)

言われるがまま、重く感じるかぶりから自身の鼻先はなを上向けていく。

鋼色はがねいろの球体・スフィアはこちらの動向にかまわず夜空を漂い、獲物えものを狙っていた。なにもできまいとふんでいるのか、単にサンプリングのための捨て駒すてこまなのか。

同化したシルバードラゴンの指示に従い、竜ヶ崎は腹部に全身の力を集めていった。次いで大きく息を吸うと、大気中の水蒸気と反応したらしい電流が火花となり、鼻先でちらつき始めた。

やおら全身にエネルギーが蓄積ちくせきされていき、電流の輝あかりがいつそう激しくなる。

だが、最後となる雷撃放出ほうしゅつのやり方は説明されなくても、竜ヶ崎にとって不可思議な感覚なのでわか

らない。仮に放つてしまえば、スフィアの乗員を殺してしまうことにならないか？

案じる竜ヶ崎は所在なく、ドラゴンの巨軀きよくを身じろぎさせた。応じて、エルシャーナの強い言葉が頭に響きわたる。

(これは死線しせんなのです。人間が我々のパーツとして利用されるか否かいなの！)

竜ヶ崎は、ふたりの鎌首かまくびを大きく揺り動かした。

(死線……。僕は戦争なんてものは——)

(わたしの体を使うのですから、これはわたしの罪つみです)と相手は一步も譲ゆずらない。

(……でもブレスのやり方すら、僕には)

(わかりました！)

とまどう竜ヶ崎の言葉は、語気を荒げたエルシヤーナにさえぎられた。

相手は姿こそ人間と違えど想像どおり、女性メスだと告げ、竜ヶ崎の頭をのほせさせる激しい言葉

を使つてきた。途端、ウロコの鼻先を破裂させる勢いで、みるみる充血が始まつた。そのまま、自身の顔が地獄の業火ほどに、熱気を帯びる。

と、その瞬間だつた。

ふたりの口から、周囲を白夜と変貌させうる白光がほとばしつた。

それはスフィアとシルバードラゴンとの間で、一本の死のフィラメントとなり、超大な球体をはじき飛ばした。

眩い雷撃にまわりつかれた相手はしばらくの間、宙をふらついたのち、数千の打ち上げ火花が炸裂するかのごとく大爆発し、木っ端微塵となつた。轟音と共に、炎の尾を持つ残骸が辺りへ降りしきる。

（ありがとう）との、おだやかな言葉も竜ヶ崎にはほとんど届いていない。

莫大なエネルギーの反動といえる精神的な刺激

に、竜ヶ崎の心が耐えられなかつたのだ。彼は自失状態のまま混乱し、竜のカギ爪で二、三度、夜空をかきむしる。

……僕は、これから。アヤさんは、どうなつた、か——。

竜ヶ崎が意識を失う寸前、エルシャーナの張りつめた声が頭に響いた。

（いけない……、すぐにわたしたちをポッド内へ移送収容してください！）

赤茶けた惑星・火星の目前を、その衛星フォボスをも覆いつくす、銅色をした球体の群れが通過していた。

無限とも思われた長旅による磨耗で、球体の表面は磨きぬかれた大理石よりもなめらかだつた。漆黒の宇宙を彩る星の輝きを、シャープに映している。

それらの頂点に位置する球体内部では、広いガラスごしに火星を見やり、紅蓮色の目を光らせる生命体の姿があった。火星の反射光を受け、全体的に角ばっていながらも、一部が微細に動く影だけが伸びた。

「首魁エルシャーナはいかほど、我々の役に立つてくれるものか」と、うねりのある言葉を発した鋭利なシルエツトが揺れる。

個室でたたずむ生命体は肉塊を片手に、祖先が行ったテラ・フォーミングのなごりが残る火星を眺め、徐に通話用コンソールのレバーを流動させた。

そう。エルシャーナたちには存分に動いてもらわねば困るのだ。我々が故郷へ帰還するまで、あと数日。それでも不完全な種族の地ならしには、事足りる時間であろう。

「サンプリングデータはすでにあるのだな。せい

ぜい暴れてもらおう。そう差し向ける」

指示を終え、自身が味わっていた生の肉片を牙で引き千切る。……この食感はたまらぬな。

にぶい金属の足音を響かせ、生命体はふたたび火星へと体を向けた。沙漠と化した惑星が、次第に暗き宇宙空間へとけこんでいく。

(2) 生き物たちの正体と欲望

竜ヶ崎は、懸命けんめいに呼びかけてくる明るくあけない声で、混乱していた意識を確かなものへ定めることができた。

ひどい頭痛ずつうがするけれど、耐えられないものではない。

横たわったまま目を開けると、スマートな顔立ちのアヤが結わえたポニーテールを大きく揺らし、表情をゆるめていった。彼女のシックなジャケツトも元どおりだ。

余裕なそぶりの、アヤの方がメンタル面は強いらしい。竜ヶ崎は乾いた唇くちびるを舌で濡らし、かすれ声を発した。喉のどはからからで焼けつくほどに痛い。

「アヤさん、解放……されたんだね」

「ええ。きちんと整えてくれたわ」とやわらかく

うなずき、彼女がこちらの手に指先サイズの、冷たいなにかを握にぎらせてくる。

「これでみなさんとお話ができる。パルージャつて、とっても紳士しんしなの」

これはペガサスやドラゴンの他にも、生き物がいるということ……。

自身の顔を手で拭ぬぐった竜ヶ崎は、天井やカベに描かれた三角やひし形など、不可思議な幾何学模様ようを眺めながら、上体を起こした。

そのまま、つややかな台座だいざの上へ腰かけ、辺りを見まわしていく。

(ようこそ。古代文明こたいぶんめいの成れの果てが集うポッドへ)と大らかな余韻よゐんの言葉が頭に響ひびいた。いくらか柔和にやわで、女性的なエルシャーナの声だ。

「ここが……、ポッドの中？」

(そうです)

自分は鋼色はがねいろをした長大な部屋の中央で、同化し

たシルバードラゴンやベガサス、加えて、猛禽類に似た顔つきで茶色い毛羽が目立つグリフィンと、人の姿をしながら空色のウロコに覆われ、背に半透明の翼を持つ相手など、想像上の生き物たちに囲まれている。

「な、そんな——」と竜ヶ崎の意識が覚醒してき
た。

常々、自分はファンタジーのあれこれを思い描いていたものの、実際に不思議の国へ迷いこんだアリスとなると、とても無邪気にはふるまえない。

いわばエイリアンといえる生き物たちを前に平然と対する、アヤの姿がなければ、自身は完璧に取り乱していただろう。

彼女は個性的な天然娘ぶりが社内で評判なのだが、それは確固たる理性のうえでの行動だったということ。アヤは事態を冷静に受け入れた。そうでなければ、自分のように肝っ玉を潰してい

るはずだから。

顔をほころばせたままのアヤは、同化していたらしきベガサスの白いたてがみを、丹念になでている。

「ほら見て、液状のコンソール」

彼女は感嘆の声をあげ、片手で部屋の離れを指差していた。

「自由に伸張できるから、どんな姿の生き物でも操作できるのよ。すごいでしょう」

「……驚異的な技術だよ」と竜ヶ崎は、声をしほり出すのでやつとだつた。

宇宙船の内部である部屋は巨大な球形状で、文様が目立つ仕切りも多い。だが、ポジシヨニングの考え方は、どうやらない。適当な場に位置した小柄な白竜(?)の前に植物のごとく、コンソールが突起となり伸びてくるからだ。

当人のいる場所が作業場となり、ボタン類が流

動するコンソールを操れるようだった。

まさしく、人類とは違う価値観念で作られた異質なテクノロジーだ。

竜ヶ崎は目をみはつて茫然とつぶやく。

「まさか、異星人と遭遇するとは思わなかったな」

(……いいえ、我々は竜ヶ崎さんと思う、エイリアンではありませんよ)

力のない動きのシルバードラゴン・エルシャーナが首を揺らし、おだやかに話しかけてきた。

(我々の祖先は人類です。文明は遺伝子の操作技術を会得し、みな、思い思いの姿に変身していきましました。とくに翼はあこがれの的)と、スリムな鼻先をわずかに揺らした。

「そういうこと……、なんですすね」

……現代でも男女の産みわけや瞳の色を変えるなど、オーダーメイド人体の技術が倫理的な論争をまき起こしている。

彼女たちは、その垣根を超えた存在だったんだ。

現代の人類はやや否定的な見解だけれども、自分だって可能なら翼は欲しい——。

途端に体が炎さながらに熱くなり、またも武者震いを始める。

竜ヶ崎は自分自身が興奮していくさまを、つぶさに自覚できた。

ムーやアトランティス、その他、超古代文明の痕跡(オーパーツ)は地球上に残されている。そのうえ、とても作家の創作物とは思えない生き物たちの、豊かな逸話は数多い。

高ぶる気持ちをどうにか抑え、竜ヶ崎は静かな口ぶりで問いかけてみる。

「ハイテクノロジーを持った古代文明や伝説とされる生き物の話は、実話だったんですね」

エルシャーナが決して、この世界を見られないものの、とても澄んだ青い瞳だけを丸くした。

（おそらく。我々は自らをナ・ターヤと呼んできました。この国の東側海洋に位置した今や幻の文明です……）

そう、太平洋があんなにも広く、一切の大陸が存在しないのは謎なのだ。

でもかつては、そこに文明が栄え、大陸があった。彼女たちは少しでも接点を見出したいと過去を思い、ここへやってきたのだろう。

だが相手の言葉は、危険な意味合いもひめている。

竜ヶ崎はエルシャーナの大海のごとき瞳の輝きを信じ、多少無礼になっても殺されはしまいと腹をくくった。

ポッド中央の相手を見つめて、早口でたずねかける。

「あなたは祖先が僕ら人類だと告げた。どうして地球から旅立ったんです？ さらに戻ってきたと

いう」

（それは……）

エルシャーナがとまどう感じに言葉をにこした。さらに、模範的なイメージとは少し姿の異なる周囲の生き物たちは、意味深な目配せを行った。

これはよくない兆候だ。

しばらくの間があり、エルシャーナの格式ばった言葉が返ってくる。

（我々は地球を見捨てたのです）

「理由があつたんでしょう？」

とつさに竜ヶ崎は、手をなだめるよう声を投げかけた。

屹然と頭を揺らしたエルシャーナいわく、自分たちの祖先は太陽の黒点異常により、集積化させたテクノロジーに影響が出る危険性を察した。そして以後、地球が周期的にみまわれた、氷河期へ入ることを知る。よって科学技術に物を言わせ、

惑星を持つ他の恒星系へ移住する計画を行った。

その際、定員の関係から「変身」の概念を拒んだ人類を劣等種として、いてつく地球に放棄した、と――。

従来からの概念を変えるには一種、多大な勇氣が必要だ。変化を拒む人類がいても、なんらおかしくはない。でも「劣等」との表現は違うな。

考えが頭を錯綜した竜ヶ崎は、半ば呆然と息をこらし、珍しくアヤが不自然なしぐさで反応していた。だけでもエルシャーナは一気に（その子孫が……、あなたたち現代の人間なのです）と極力、感情を抑えた響きで話を終えた。

人類は元々、生き物たちと同じ種族で、そのうえ地球に放棄された身だった……。

しかし語られた言葉には、悔悟の情が確かに含まれていた。

自分たちが見捨てられた種であったことには、

大きなショックを受けたけれど、直接関わらない子孫であり、悔いている相手に罪はないと思う。

「その。僕たちは……」と、まだうまく、自身の考えを言葉にできなかった。

口をつぐみ、竜ヶ崎はほんやりと摩訶不思議な周囲を見まわした。

……仮に見捨てられた種であっても、現代文明を開花させるまでに至ったのだから、変に卑下しない方がいい。問題はその先の、なぜ相手が戻ってきたか、だ。

竜ヶ崎の意識を読んだのか、シルバードラゴンから正体のわからない生き物までもが、ぎこちなく体を揺り動かした。

エルシャーナは前足に簡素な器具（リング）をつけており、それで存在しない能力を補っているらしかった。周囲の生き物たちも同様だ。

ふつと竜ヶ崎の脳裏に、恐ろしいインスピレー

シヨンがほとばしった。

彼女たちは破壊したスフィアと同じく、自身が持たない「モノ」を求めているのではないのか——。

これは驚愕すべき事態であり、竜ヶ崎はささやき声を放つことしかできない。

「あなたたちは……人間の肉体を」

（そのとおりです）と、言葉の先を察したらしいエルシャーナが顔をそむけた。その動きはまるで、横たわる獲物を前に、貪欲な自身の心を戒めているかのようだった。この……自分の体が……痛切に求められている——。

台座から飛び降りた竜ヶ崎は、ひるまず相手の鼻先へ駆け寄り、大手を振って呼びかけた。

「人類もES細胞だったか、それらで臓器を作れます。どうして行わないんですか？」

エルシャーナは竜ヶ崎の気迫に圧されたふうに、

びくつと鼻先を引く。

（生体外で増殖させると遺伝子の異常が蓄積していきます。結果、堂々巡りでこの技術は破棄されました）

「ならば……、ここまでの科学技術があるんです。人工臓器で補えるでしょう」と首を振るって大声を張った。対しエルシャーナは焦点こそ定まっていないうが、この肉体に食らいつかんばかりに首をもたげ、鋭い牙をみせてくる。

（長い間の閉鎖環境が、遺伝子に恒久的なダメージを与えました。そして、むりな補正がこの結果です）

「だけど」との声は、シルバードラゴンの絶叫に近い言葉でさえぎられた。

（あなたはやはり、脳までも完全に機械化しろといわれるのですか？）

「いえ、そんな意味ではありません！」

(ならば、どういう意味なのです?)

頭で吼える相手は、ハイテクに頼らず最低限の補助で最大限、自分の力で問題を打開しようとしている。漠然とだが、そんな心が感じられた。

竜ヶ崎は複雑な心境のまま、黙って相手を見つづける。

(能力すべてを機械化したら、わたしは一体なんなのでしよう)と鼻先を揺らし、エルシャーナの言葉に悲哀感が加わった。

その理屈はわかるけれど、納得のいかない点もあった。多くの生き物たちが見守るなか、腕を振るった竜ヶ崎もどなりかかる。

「つえに頼るのは間違いない!」

(では補佐以上のパワーもあり、希望通りに動くつえでしたら、あなたは依存しませんか? そのうち、つえの言いなりになって、自我を失いませんか?)

「それは、ええ」と、反論できる答えを見出せなかった。

確かに思いどおりに動く道具が、いいや、自動化されて自発的に動く道具があったのなら、たぶん依存するだろう。さらに道具が、恐るべきパワーを出せるのであれば、なおさらだ。

でもそのうち、行動が自らの意思によるものか、道具の意思なのかわからなくなるかもしれない。

すべてが効率的に動く、“機械化生命体”の誕生だ。

目の前のエルシャーナや、破壊したスフィア内の連中は手段に違いこそあれど、自分自身が高機能な機械の部位にすぎないと思ひ始めた。なので、生き物たちはモノに互換性があり、かつ“生物学的な人の体を欲している”。

竜ヶ崎の背すじには微かに戦慄が走ったものの、彼は後ろ手を組んで相手を見上げ、そっけなく疑

問を放つ。

「拒絶反応はないんですか？」

（精神面が合致すれば、物理的な障害はありません）と言いつ切る言葉に、竜ヶ崎はある種の冷やかさを覚えた。

文字どおりスフィアの連中は冷酷で、無慈悲だった。精神面の合致ということはあの現場では、連中と同じように忌んだ意識を持った人間を狙ったのだろうか。

逆にエルシャーナと同化ができた自分は、なか合致する面があったということ？ おそらく自分自身が持つ、ゲーム関係の知識が関係しているのかもしれない。

ここで竜ヶ崎の思考にエルシャーナの言葉が割りこみ、混乱のあまり、彼女の真意を見誤ってしまふ。

（わたしは移送技術を使い、肉体をむりやり剥ぎ

取る同化には反対です。断固阻止するため、パートナーを探さねばなりません）

「……そうですか」

ここまで話を聞かせておきながら、つまりこの自分では「役不足」ってことなんだな。

幼い発想だとは思えるが、なぜか感情を抑えきれず、無性に腹が立った。竜ヶ崎は洪面のまま両手で、髪をかき上げていく。

徐に駆けて立ちんぼの、アヤの手を引つ掴んだ。多くの視線に耐えつつ、白銀色のポッド内を歩きまわる。

「帰ろう。いい人間がみつかるといいですね。出口はどこですか？」

ふたたび沈黙し、間を空けたエルシャーナが静かな言葉を響かせた。

（精神にダメージを与えてしまった点を……、謝罪します。ここは洋上です。元の場合まで移送し

てさしあげなさい……)

その途端、幾何学模様が特徴的だったポッド内の光景は薄れ、一呼吸のちには、警察車両が何台もとまる物々しい新宿駅前へ、きりかわった!

事件とは裏腹に朝日が眩しい一帯を眺め、竜ヶ崎はぼつねんとつぶやく。

「物体の転送もできるのか。ハイゼンブルグの不確定性原理も真つ青だな」

こみあげた心の情動をごまかすため、テクノロジーのことに意識を集中させる。

確か、素粒子の位置情報と運動情報は同時に取得できないので、テレポーテーションなどは夢物語だと、物理学の担当が笑っていた。

対し、〃空中を飛ぶ機械は存在し得ない〃と理論づけた科学者の例をあげ、食い下がった自分の学生時代が懐かしく思い出される。

結局のところ、実現できているではないか。

と不意に、アヤとつないだままの手が握られ、彼女がこちらの顔を覗きこんでくる。

「空間そのものの移送って教えてもらったよ」

アヤは甲高い声で告げ、つないだ手を激しく揺さぶってきた。応じて竜ヶ崎は、低くうなる。

「なるほど。それなら可能かもしれない」

「まだそんなこと言って」

彼女が手を離して自身の腰元にやり、不機嫌そうに調子で言葉を並べ立ててきた。

「竜ヶ崎くん、性急すぎる。エルシャーナさんは、あなたを心配して遠まわしな表現をしたのよ! 同じ女性だからわかるの」

「そういう……こと、だったのか……」

矢継ぎ早の展開に自身の心が対処できておらず、そこまで気がまわらなかつた。単純に拒絶されたと信じきっていたものの、自分は偏狭な見方をして、ためらいがちに伸ばされていた手を拒んだの

だ。そう、けんもほろろに――。

現にエルシャーナは「一時」との約束どおり、体の同化をといってくれていた。それにもかかわらず、自分はろくでなしの愚かなふるまいをした。

やり切れない思いにさいなまれながら、竜ヶ崎はアヤと共に、社屋が入居する雑居ビルへと帰りついた。四階フロア一角の端末にIDカードを通し、地味なパーテーションで区切られたオフィス内へ進んでいく。

やおら、パソコンラックに足を乗せてくつろぐ、無精ひげのチーフが朝刊から目を離し、声高に冷やかに話してきた。

「よ、竜ヶ崎。メンテすつぽかして、アヤちゃんはお持ち帰りかい？」

その老けた顔はニヤけきっている。と、竜ヶ崎が反論するより早く、すました顔つきのアヤがチーフの前で肩をすくめていた。

「清水アヤは、そこいらのファーストフードと違えますう」

彼女は苦りきった声色で、ちよろつと舌を出した。

きりかえのうまさは、やはり理性に裏打ちされたものだ。天然だと認識された方が、対人関係はずっと楽になるから。けれど自分には素の状態ですべて接してくれる。

どうしてだろう。

そんなことを考えながら気を紛らわし、竜ヶ崎は今の自分にできうることをパソコン前で行っていた。

それはオンラインRPGへのイベントの追加だった。ドラゴンや生き物たちを、旅の相棒にできるストーリー。

「お前、逆だろ。人類の敵どもが現れたんだぞ」
と目を剥くチーフの言葉を無視して、作業を強

行した。

アヤはチーフの前に立ちほだかり、おつとりとした口調で「彼は本物と話したんですよ。ぜんぶ合つてまゝ」と言い切つた。

「アヤちゃんには、かなわんなあ」

鼻をならしたチーフが文句を言いながらも、ヒーヒーカップを片手に離れていく。竜ヶ崎はパソコン画面へ向き直つた。

元々、C＋＋言語で作りかけて中止させられたクラス・ライブラリの組みこみなど、竜ヶ崎にとつて造作もないことだつた。

せめて、ここだけでも……平和な世界にしたい。バーチャルな世界へ逃げこむ自分は軟弱者だ。

しかし、この身はヒーローという柄でもなく、体験した出来事や聞かされた話が、どこか白昼夢のように感じられていたから。そう、自分はごく普通の人間なのだから……。

うやむやな気分のまま、竜ヶ崎はプログラミングをつづけた。

その数時間後に事件が起こる。

事件のキーポイントは昨晩にあった。

新宿に現れたスフィアが破壊される直前、逃げまどう人々のかたわらで取引が行われていたことは、誰にも知られていない。

うす暗い高架下で一見、生真面目そうな生徒に見える受験生・志藤毅は幻覚きのこを手にとり支柱へもたれ、殺戮劇を眺めていた。

「ほら、走れ走れ。食われるぞ」

志藤の目標とされる場合は、とある有名高校のみ。過度のプレッシャーから逃れるため、毎週ドラッグを楽しんでいるものの、今日はより趣があつて愉悦な気分とさせてくれる。

自分だけが壊れるのでは物足りない。この世界

すべてが壊れてしまえばいい。

年間、三万人もの自殺者が出ている夢も希望も救いもない日本には、とりわけぴったりの〃処方箋〃だらう。

志藤が死にゆく人間を見やって笑んでいたところ突然、鬼さがらなの背格好でコウモリ似の翼があるモンスター（相手はガーゴイルと名のつた）が舞い降りてきた。

どうやら殺しにきたわけではないらしく、人間の生きた知識が必要とのこと。醜態の志藤は巨漢な相手に動じず、端的に話をまとめていった。カラスより長く鋭いガーゴイルのくちばしが開かれ、頭に走った電気的な刺激が言葉に変化していく。

（お前の思念は俺と一致する。俺に知識を与えよ。その代わり、お前が望む殺戮を存分に楽しませてやる）

「破壊のための知識だな。いいだらう」と少年が応じた矢先、ガーゴイルが奇怪に歪んだ腕を広げ、この体を抱きこんできた。

志藤の学らんが溶け始め、皮膚もとろけて垂れ下がった。彼は速やかに、ガーゴイルの体内へ吸収されていく。

「ふふ。この文明は、ずいぶん陳腐な言語を使うのだな」

吸収を終えたガーゴイル自身が、ざらついた肉声を発した途端に、スフィアは砕かれた。しかし乗員の一部は、ひそかに脱出していたのだ――

(3) 高機動型・ワイバーン

そして翌日、街が動きだす通勤時間帯に事件は起こつた。

休息室のソファで長軀を横たえていた竜ヶ崎の目に、テレビのニュース速報が映る。

突発的な事件のはずなのに、どうして中継されているんだ？

中継映像は進み、古代のプテラノドンに近いワイドな翼と、ピラミッド型に安定した姿がはつきり確認できるようになる。体のほとんどを銅色の部位で覆ったワイバーン二頭は、無防備な列車に猛々しい火炎のプレスを放つた。

「や、また大惨事になる！」

目をみはって飛び起きた直後、お互いを補佐し合う、エルシャーナたち一行が高架橋の上に現れ

た。

火炎はシルバードラゴンのどてつばらを襲い、苦悶のうめき声がテレビ画面ごしに伝わってくる。ハイテクの補佐をひかえる彼女たちは、リングだけしかつけておらず、圧倒的に条件が悪い。

案の定、俊敏な飛翔をするワイバーンに対しエルシャーナたちは、じれるほどに動作がスローテンポだ。それでも臓器を奪うどころか、捨て身でドナーの人類を守ってくれている。

偽りの行為ならば、自分自身の命を張ってまで戦うことなどできまい。

「彼女たちを助けないと……！」

竜ヶ崎の頭にあつた肉体喪失の懸念は、完全に消え失せた。

むしろ、ごく普通の人間がどれだけ助太刀できるものか、限界にチャレンジしたくなってきた。

竜ヶ崎は重たいスーツを脱ぎ捨て、ワイシャツ

姿でオフィスの出入り口へ駆ける。と、そこには体を引き締めた感じの、アヤが待ち受けていた。

「行くんでしょう？」と身をひねり、明るい廊下を彼女も一緒に走り出した。なんでも、竜ヶ崎の絶叫が聞こえたらしい。

屋外の非常階段をジャンプして駆け下りながら、アヤへ声をかけてみる。

「いいの？ 今後は……、とても厳しい道のりになると思うけど」

「IT業界は元々、厳しい世界じゃない。どっちも同じよ」とポニーテールを揺らし、彼女はさわやかな笑顔で答えをはぐらかしてきた。答えにまつまった竜ヶ崎は思わず、こざっぱりとした頭をかき上げていく。

間接的に自分を支えてくれているアヤへ、心で目いっぱい感謝し、雑居ビルの駐輪場で予備のヘルメットを投げ渡した。

「どうしてアヤさんみたいな人が、この業界に？」

これはいつも疑問に思っていたこと。自分とはとえバーチャル空間でも（実際、リアルになりつつあるが）、夢の国を作りたかったため……。

少し間を空けた彼女が身を寄せ、マウンテンバイクの引き出しを手伝ってくれる。

「え、そうね。素性を詮索されないから、かな」

と会話を打ち切りの方向へ進めていった。

「なるほど」

路上までバイクを押し出し、あいまいな返答をする竜ヶ崎。

自分は不思議な女性アヤに興味をいだいているのだが、人それぞれ、わけがあるんだろう。性格をスイッチしているのもそのせい？ すべてをこちゃまぜにできるから。

たしかにこの世界は実力主義で、なおかつハードな業務でも文句を言わずにこなす人材なら、